



Title	ネパールにおける識字教育の展望：女性たちの立場性の質的考察を踏まえて
Author(s)	長岡, 智寿子
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44832
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	長岡智寿子
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第18335号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	ネパールにおける識字教育の展望～女性たちの立場性の質的考察を踏まえて～
論文審査委員	(主査) 教授 平沢 安政 (副査) 教授 内海 成治 助教授 志水 宏吉

論文内容の要旨

本研究の目的は、ネパール王国（以下ネパール）における識字教育事業を事例としながら、教育機会を奪われてきた人々が識字プログラムへの参加を通じて、その経験をどのように意味づけていくのかに注目することにより、数値的評価に偏った従来の調査報告とは異なる角度から、今後の識字教育に求められる視点を見出すことである。

ネパールにおいてこれまでに展開してきた識字プログラムはノン・フォーマル教育の中に位置付けられており、主として成人女性を対象に行われている。学習に参加する女性たちの多くが、文化的、社会的、経済的、政治的に周辺化された立場に置かれていることから、識字プログラムの究極的なねらいは、基礎的な読み書き能力の習得を通して、学習参加者に社会参加を促すことである。

識字プログラムは、ネパール政府により計画された教育開発政策に基づき、基礎初等教育の普及、拡大に向けた重要な事項の一つに位置付けられている。実際には国内外のNGOが実働体となり、その運営を担っている。しかし、NGOが実施主体であるからといって、プログラムの運営は必ずしも学習者の立場を充分に考慮したというものではなく、また、学習評価についても識字率の数値的向上のみを重視する傾向が強いといえる。中には、実績を残そうと互いに競合し合うあまり、本来の目的から離れ、識字プログラムを開発案件として利用し、多額の援助資金を獲得することだけを自己目的化するような市場主義に陥ってしまっているとの批判（Khanal, 2001、Tuladhar, 1999、2002）もあり、識字教育の本来の意義が実現されているとは言い難い現状にある。

そこで、本研究では、これまでの量的な質問紙調査や数値的評価に偏った調査報告（例えば、UNICEF & NPC, HMG, 1996、CERID, 1996、1997b、1998bなど）には記載されてこなかった学習者の立場性を質的に明らかにすることで、識字教育事業の目指すべき方向性を捉えなおす視点を提起したい。したがって、学習に参加した女性たちに視座を据え、これまで社会の中で不可視化してきた女性たちから社会の中心を見つめる視点に立って考察を行う。

具体的には、序章にて、本研究の課題と方法を明らかにした後、第1章において、これまでの国際社会における開発政策の経緯を辿りながら、開発途上国における教育開発政策の全体的動向を明らかにする。第2章では、ネパールの教育開発政策の展開を文化的、社会的背景にも触れて、これまでの歴史的経緯を概観する。さらに、ノン・フォーマル教育プログラムの現状と課題について、そのアプローチを中心に分析する。第3章では、識字プログラムに参加した女性たちの生活世界への接近を試みる。参与観察、インタビュー記録をもとに、女性たちが読み書きの学習をど

のように意味づけているか（解釈しているか）を、彼女たちがこれまでに置かれてきた社会的状況にも視野を広げ、学習との関係性を考察する。また、ネパールはヒンドゥー教を国教とするヒンドゥー国家であり、社会体制はカースト制を基盤としている。カースト社会という複雑、あるいは宗教的色彩に富んだ社会構造の中で、女性たちの社会的な付置状況を把握するには、彼女たちの声に耳を傾けるだけでは判断できない。ゆえに、ネパール政府関係者、NGO関係者、地域住民などの人々の声をも分析材料とし、「彼女たちの生きる世界」を捉えていく。そして、第4章では、本研究で得られた知見からネパールの教育開発政策を振り返り、今後のネパールの識字プログラムに求められる示唆を提示する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ネパールにおける識字教育の分析を通じて、識字学習者が識字能力の獲得や学習への参加をどのようにとらえているのかに着目することで、今後の識字教育に必要な視点を見いだすこと目的としている。従来の開発途上国における識字教育については、国際的な開発援助の枠組みにもとづく数値評価中心の分析が行われてきた一方で、学習者のライフヒストリーにおいて識字がどのような意味をもっているのかは十分考慮されてこなかった。つまり、識字教育プログラムの費用対効果の分析はなされても、識字学習への動機付けや意味づけが、必ずしも明らかにされてこなかったといえる。申請者は、国際的な開発援助の歴史を概観する中で、人間開発という視点への重点移行をあとづけ、そのような考え方方が識字教育の事業や理論にどのように反映されてきたのかを明らかにした上で、ネパールの被差別カースト女性を中心とした50名以上の識字学習者へのインタビュー調査をふまえて、識字学習への参加が学習者の内面的变化や社会に対する姿勢の変化にどのような影響を与えてきたのかを描き出している。また、本研究を通じて、研究対象者の立場性およびそのエンパワメント、また研究者と対象者の関係性について批判的に考察することにより、識字教育研究に今後エスノグラフィをどのように生かすかについても論じている。

申請者が提示した「立場性」に関する議論の中身や、識字教室における参与観察が十分とはいえない点など、残された課題もあるが、識字教育のあり方を開発援助の枠組みに位置づけたマクロな視点や、学習当事者の意味づけに焦点をあてたエスノグラフィックな分析は、識字教育研究者だけでなく、生涯教育や教育開発に関わる研究者・実践者にとっても、今後求められる視点や枠組みのあり方を包括的に提示するものであり、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。